

いきいきエデュケーター③

—子育て・孫育て・自分育ち—

くだけけ会代表

和田重良



好きとか嫌いとか誘導しないで

子どものあんしん、家族のあんしん

人は、好きだの嫌いだのと言っている時は本当の「自分」に出会えません。なるべくなら言わないほうがしあわせです。

子ども日めくりに『キライから入ると道が狭くなる』という一ページがあります。なるべく好きだの嫌いだのを減らした方がいいのです。

昔からですが、親が子どもの好き嫌いを誘導していることがあるのです。「○○ちゃんはピーマンはキライなのよね」なんて言うものだから、いつまでたってもそれが修正できなくなって、大きくなっていろいろな場面で「好き」だの「嫌い」だのが自分の行動基準になっていってしまいます。それって自分を小さく囲ってしまいます。

食べ物ならまだしも、人相手に「好き」だの「嫌い」だの決めつけたり、できごとを「好き・嫌い」で決めたりしてしまうと子どもの人生はどんどん道が狭くなってしまいますよ。よく「算数きらいだもん」とか「音楽きらいだもん」と言ってる平然としている子がいます。ウスッペラな感じですよ。だって初めっからそのことにフタをしてしまうわけですから。

「本当は、美味しい、まずい、合う、合わない、得意、不得意、損、得……そんな様々な判断基準があつて、いちがいに「好き」か「嫌い」では決められないことが

多いのです。

そもそも、好き嫌いは感情の中でも表面的な、一番表れしやすいものであつて、それに振りまわされて自分の行動を左右しては、その奥にある魅力を見損なうことが多いのです。

ピーマンだって、単純な炒め物は好きじゃないけど肉詰めピーマンならおいしいってこともあるじゃないですか。ジャガイモだっていろいろな食べ方があるのですからね。ちなみにぼくはみそ汁に入っているジャガイモは食べるけど……ってなワケでいろいろなのです。親が決めつけて誘導する「好き・嫌い」は子どもの努力のチャンスを失うばかりか、能力伸長のチャンスをミスミス放棄してしまうことにも通ずるのです。

例えば、嫌いな分野にある受け入れ難い絵や音楽を見させ続けられたり、聴かせ続けられたりすることは耐えられるものじゃあないでしょうから、自然とそういうも

のには距離を保つようにできていますね。「嫌い」ということはあえて主張しなくてもちゃんと自分らしく生きていけるようにできていますから、決めつけなくても大丈夫なのです。

ちよつと嫌だなど思うことでも少し努力してチャレンジしてみたら意外に「よかった」「面白かった」「おいしかった」と入口が見えることだってあります。そういうことに出会った時には「意外な『自分』」を発見できるチャンスです。

「自分」の道を狭くして、限定した囲いの中に閉じ込めでは「教育」の内容は半分になってしまいます。

一口メモ

お母さん、お父さんの都合で

子どもに好き嫌いを決めないで